

今日の倫理観では不適切とみなされるような性的な表現が出てまいりますが、作品の書かれた時代背景をご理解いただきたく存じます。また⑪⑫の旧約聖書の歌は、「恋人」の関係を「神と人との関係」に置き換えて鑑賞されてきた歴史背景がございます。

①Weep, O mine eyes 泣くが良い、我がまなこよ

Weep, O mine eyes and cease not,
alas, these your spring tides methinks increase not.

O when begin you
to swell so high that I may drown me in you?

泣くが良い、我がまなこよ、泣き止むな。

ああ、今は大潮のはずなのに、お前たちはそれだけしか流れ出ようとせぬのか。

いつになれば、この私がお前たちの中で溺れ死ぬほども

涙をあふれさせてくれるのか。

<逐語訳>

Weep 泣け O おお(間投詞) mine 私の(中英語) eyes 目よ and そして cease 終えろ not
～するな alas ああ(間投詞) these これらの your お前たちの spring tides 大潮 methinks
思うに increase 増大する not～しない O おお(間投詞) when いつ begin 始めるのか you
お前たち to swell 増える so (so～that・・・の構文で、「・・・であるほど～な」) high 高い that
(前出) I 私が may かも知れない drown 溺れさせる me 私を in ～の中で you お前たち

ダウランドの Flow my tears は大ヒットし、雨後の筈のように似たような曲を生み出しました。Wikipedia によると「ヨーロッパ中に現存する写本や刊本のうちおよそ100冊ほどに同曲やその変曲が収録されている」とのことです。しかし、それらのうち400年後の現在でも愛唱されているのは、この曲ぐらいではないでしょうか。

こう言うと、「だったら、どうしてオリジナルのダウランドの方を取り上げないのか？」というお叱りを受けそうですが、ちょっと待って下さい。Flow my tears の歌詞を読んでいただければお分かりのように、あの曲のテーマは「メランコリー」であって「恋」じゃないんです。失恋ならば、新しい恋のお相手が見つければ憂鬱な気分も晴れるかも知れません。でも、Flow my tears が歌っているのは、「気質」としてのメランコリーであり、その気持ちが晴れることはありません。

ダウランドはメランコリーの表現という、新しい表現様式をヨーロッパに流行させたのです。しかし、一見 Flow my tears のオマージュにも思えるこの曲の歌詞は、よく読んでみれば「失恋の歌」と解釈できなくもありません。

はやりの「メランコリーの表現」が好きな層にも受け、かつオーソドックスな「失恋の歌」を好む聴き手をも魅了すること。作曲家のベネットの目論見がそんな欲張りなものであったとするなら、大成功を収めた、と言えるのではないのでしょうか。

②Douce dame jolie

Douce dame jolie,
Pour dieu ne pensés mie
Que nulle ait signorie
Seur moy fors vous seulement.

Qu'adès sans tricherie Chierie
Vous ay et humblement
Tous les jours de ma vie Servie
Sans villain pensement.

Helas! et je mendie
D'esperance et d'aïe;
Dont ma joie est fenie,
Se pitié ne vous en prent.

Mais vo douce maistrie Maistrie
Mon cuer si durement
Qu'elle le contralie Et lie
En amour tellement

Qu'il n'a de riens envie
Fors d'estre en vo baillie;
Et se ne li ottrie
Vos cuers nul aligement.

Et quant ma maladie Garie
Ne sera nullement
Sans vous, douce anemie, Qui lie
Estes de mon tourment,

A jointes mains de prie
Vo cuer, puis qu'il m'oublie,
Que temprement m'ocie,
Car trop languit longuement.

②優しく美しい貴婦人よ

優しく美しい貴婦人よ、お願いでございますから、お考え下さいますな。
どうか、奥様以外のどなたも
私の女主人ではなからんことを。

私はいつも、浮気することなくあなたを心の内に秘めてきた、そして謙虚に私の生涯のすべての日に仕えてきました、卑しい考えもなく。

ああ、私は希望と安堵を求めている、なぜなら、あなたの慈悲がなければ私の喜びは終わりを告げるからだ。

しかし、奥様が優しいご主人さまであられることは私の心を強く支配する、そのためそれは私の心を苦しめ、そして愛できつく縛りあげる。

そしてそのために、私の心はあなたの執行官になることだけを願う、それでもなお、あなたの心はみずからを変えようとはしない。

私の病気が癒されても、これからも「私の優しい敵」であるあなたなしではありえない、そんなあなたは私の苦しみを見て喜びを感じるのだ。

あなたの心が私のことを忘れているので、握りしめた手で私は懇願する、「すみやかに私を殺してください、あまりにも長い間、私はやつれているのですから」、と。

<逐語訳> Douce 優しい dame ご婦人 jolie 美しい Pour~のために dieu 神 ne 「ne~mie」の構文で「~してはいけない」pensés 考える mie (前出) Que どうか~でありますように。(後に接続法を伴うと「祈願文」を作る。) nulle 誰もいない(中世仏語、英語の No one) ait 持っている(通常は a。ここでは接続法。) signorie 女主人(中世仏語では seigneurie、ここではイタリア語に近いスペル) Seur~の上の(古仏語。中世以降は sur。) moy 私(中世仏語。現代語は moi。) fors~を例外として vous あなた seulement だけ Qu' (英語の that 節と同じ。前に「お考え下さい」が省略) adès 今も(ラテン語の ad id ipsum から変化? イタリア語は adesso。) sans~なく tricherie だます、浮気をする Chierie 慈しんだ、心に秘めた Vous あなたを ay 私は~する(後の過去分詞 servie と対で複合過去。英語の I have、現代語は ai。) et そして humblement 謙虚に Tous 全ての les jours 日 de~の ma 私の vie 生 Servie 仕えた Sans~なしに villain 下品な pensement 考え(中世仏語。現代語は pensée。) Helas! ああ(詠嘆の間投詞) et そして je 私は mendie 願います D'~につて esperance 希望 et と d'~について aïe 安堵; Dont そこで ma 私の joie 喜び est は fenie 終わる(中世仏語。現代語は finie。) Se もし(中世仏語。現代語は si。) pité 思いやりが(中世仏語。現代語は pitié。) ne ~しない vous あなたを en そこに prent 取る(古仏語。現代語は prend。) Mais しかし vo あなたの(vos の変形したもの?) douce 優しい maistrie ご主人であることは Maistrie 支配する(中世仏語 maistrier の3人称単数) mon 私の cuer 心を si 「si~que・・・」の構文で「と

ても～なので・・・だ」 *durement* 厳しく *Qu'* (前出) *elle* それ (ご主人であること) は
le それ(私の心)と *contralie* 争い *Et* そして *lie* 結び付ける *En*～に *amour* 愛
tellement 強く *Qu'*(前出)*il* それ(私の心)は *n'*「*ne~rien*」で「何も～ない」*a* 持っている
de～の *riens*(前出) *envie* 羨望 *Fors*～以外の *d'estre* ～である (現代語 *d'être*) *en*
 ～の中 *vo* あなたの *baillie* 執行官;*Et* そして *se* 自ら *ne*～しない *li* 彼女は (古仏語。現
 代語は *elle*。) *ottrie* 与える *Vos* あなたの *cuers* 心に (現代語 *coeur*) *nul* 何も *aligement*.
 調整・調節を (現代語は *alignement*) *Et* そして *quant*～の時には *ma* 私の *maladie* 病氣
 が *Garie* 治った (古仏語。現代語は *guérie*。) *Ne* (後の *nullement* とともに) ～が全
 くない *sera*～であろう (英語の *be* 動詞にあたる動詞の3人称単数未来形) *nullement*(前
 出) *Sans*～なしで *vous* あなた *douce* 優しい *anemie* 敵 (古仏語) *Qui* (前の「敵」
 を受ける関係代名詞) *lie* 結び付ける *Estes* 喜び *de*～から *mon* 私の *tourment* 苦しみ
A～において *jointes* 握りしめた *mains* 手 *deprie* 祈る、懇願する (恐らくは「悪事や過
 ちの赦しを乞う祈り」*déprécation* の動詞。現代語では動詞としては使用されない。) *Vo*
 あなたの *cuer* 心に *puis qu* なぜなら (現代語では *puisque* とつなげる。) *'il* それ (あな
 たの心) は *m'*私を *oubli* 忘れてから *Que* (英語 *that* 節と同じ。懇願する *deprie* の
 目的語を示す) *temprement* まもなく (中世仏語) *m'*私を *ocie* 殺す (不定詞 *occire*、
 「殺す」「落ちる」のラテン語 *occido* から。西洋 *occident* も「日の落ちる場所=西」と
 して派生。) *Car* なぜなら *trop* あまりに *langui* やつれた *longuement* 長い間

③Quant je suis mis au retour

Quant je sui mis au retour
De veoir ma dame,
Il n'est peinne ne dolour
Que j'aie, par m'ame.
Diex! c'est drois que je l'aim, sans blame,
De loial amour.

Sa biauté, sa grant douçour
D'amoureuse flame,
Par souvenir, nuit et jour
M'esprent et enflame.

Et quant sa haute valour
Mon fin cuer entame,
Servir la vueil sans folour
Penser ne diffame.

③わが奥方さまにお目にかかって

わが奥方さまにお目にかかって帰ってきますと、あの方のおかげで私の心には何一ついやなことはありません。

神よ、私があの方を何一つけなすことなく、忠実なる臣下としてあの方をおしたいし、愛しておりますのは、まさしく正しいこととございます。

彼女の美しさ、恋の炎に映えるその大いなる甘美さは、私の記憶の中では、昼も夜も絶え間なく私の心に火をたきつけ、燃え上がらせております。

そして、彼女のいと高き価値が私のか弱い心の中に入り込んでしまったので、私はよこしまなことを考えることなく、また彼女の名誉を傷つけることもなく、これからも彼女にお仕え申し上げたい。

<逐語訳>Quant～の時には (現代語 *quand*) je 私が *sui mis*～の状態になった *au retour* 帰還 De ～から *veoir* 会う (中世仏語。現代語は *voir*。) *ma* 私の *dame* ご婦人 Il (「Il est~que・・・」の構文で「・・・は～だ。」英語の *It is~that*・・・と同じ。) *n* ～でない *'est* (前出) *peinne* 苦勞 *ne*～でない *dolour* 痛み (現代語は *douleur*。) *Que* (前出) *j'*私が *aie* 持っている (*avoir* の接続法現在第一人称単数形。発音は直説法の *ai* と同じ。) *par*～によって *m'ame* ご婦人 (*madame* の短縮形) *Diex!* 神よ *c'est* それは～だ。(前出の *Il est~que*・・・と同じく *que*・・・の内容が～だ、と述べる。) *drois*

正しい (現代語は droit) que (前出) je 私が l 彼女を 'aim 愛している, sans~なしで
 blame 非難 De~から loial 忠誠の (現代語 loyal) amour 愛 Sa 彼女の biauté 美しさ
 (現代語 beauté) sa 彼女の grant 大いなる (現代語 grand) douceur 甘美さ (現代語
 douceur) D'~の amoureuse 恋の flame 炎 Par~によって souvenir 思い出 nuit 夜
 も et そして jour 昼も M'私に esprent 火をつける (中世仏語 esprendre の 3人称単
 数。現代語は éprend。) et そして enflame 燃え上がらせる (中世仏語) Et そして quant
 ~なので sa 彼女の haute 高い valour 価値が (現代語 valeur) Mon 私の fin 細い cuer
 心に entame 割り込む Servir 仕える la 彼女に vueil 望む (現代語は veux) (※servir
 は不定詞、la は代名詞、vueil は 1人称単数現在形なので、主語を補うと je vueil la servir
 の語順が本来正しい。) sans ~なしで folour 狂っていること (現代語 folie) Penser 考
 える ne~しない diffame 名誉を傷つける

「恋愛は12世紀の発明だ。」とよく言われます。日本では8世紀の万葉集に多くの恋愛の歌が見られます(万葉集も実際にメロディーを付けて歌われていました)が、西洋ではキリスト教が性的なものに抑圧をかけたことで、恋愛の文学・音楽は栄えませんでした。ところが12世紀になって、突如、フランスの吟遊詩人たちが「身分の低い騎士が主君の奥方の貴婦人に恋をする」というジャンルの詩を歌い始めたのです。

後の時代になって「宮廷恋愛 amour courtois」と呼ばれるこのジャンルはヨーロッパで大流行しますが、研究者の鈴木隆美によれば、あの時代に恋愛観に革命が起きたのだそうです。

『当時の貴族の結婚は政治的、経済的な生き残り戦略として行われるものでしたので、「経済的な理由で人を好きになるのではない、恋愛とはもっと崇高な、精神的な愛の方が価値がある」という考えが生まれます。』(雑誌「LEON」の記事から)

フランスで生まれた宮廷恋愛文学は、やがてはイタリアのダンテやペトラルカにも影響を与え、彼らはラテン語ではなくイタリア語で恋愛に関する作品を書きました。それが今日ではルネサンスの開花と評価されていますので、まさに恋愛こそがルネサンスの源のひとつだった、と言えるでしょう。

④Quel fronte signorille

Quel fronte signorille in paradiso
Scorge l'anima mia,
Mentre che in suo balia
Stretto mi tiene mirando il suo bel viso.

I ochi trapassa tuti dei altri el viso
Con si dolce armonia
Che i cor nostri se'n via
Pian pian in suso vano in paradiso.

④その高貴な眉を見ると

その高貴な眉を見ると、
私の魂は樂園へ連れて行かれてしまう。
一方では私は彼女の美しさに服従させられ
ながら、
他方では私は彼女の愛らしい顔に見惚れる。

彼女の目は、ほかのどんな顔の目よりも突き
抜けて美しい。
我らの心が我らから離れていくような、
こんなに甘いハーモニーで、
我らの心はゆっくりと天へ昇ってゆく。

<逐語訳> Quel その (quello の短縮形) fronte 眉は signorille 淑女の (現代語は signorile) in ~へ paradiso 樂園 Scorge 連れて行く l' (定冠詞) anima 魂を mia 私
の Mentre che 一方では~しながら in~に suo 彼女の (※修飾する balia が女性名
詞なのになぜ sua でないのか不明。 sua に変更しているサイトもあり。ちなみに balia
の語源である中世仏語 baillie も女性名詞。) balia 力 Stretto 縛り付けた状態に mi
私を tiene (彼女の眉は) 保つ mirando じっと見る il (定冠詞) suo 彼女の bel 美
しい viso 顔を I (定冠詞) ochi 目は (現代語 occhi) trapassa 貫く tuti 全て dei
~の altri ほかの el (定冠詞、現代語は il) viso 顔 Con~とともに si とても (現
代語は sì) dolce 甘い armonia ハーモニー Che (関係代名詞) i (定冠詞) cor 心
(現代語 cuori の 古語 cori の短縮形)

nostri われらの se みずからを'n ~へ (in の短縮形) via 道 Pian pian ゆっくりと

(piano の短縮形) in へと suso 上 (現代語は su) vano (私たちの心は) 行く (現代語は vanno) in~へ paradiso 楽園

⑤ La belle se siet au piet de la tour

La belle se siet au pied de la tour,
Qui pleure et soupire et mainne grant douleur.
Son pere lui demande: «Fille qu'avez vous?
Voulez vous mari, ou voulez vous seigneur?»
«Je ne veux mari, je ne veux seigneur;
Je veux le mien ami, qui pourit en la tour.»
«Et par Dieu, belle fille, a celui faudrez vous,
Car il sera pendu demain au point du jour.»
«Et pere, s'on le pend, enfouyez moi dessous,
Si diront les gens: voici loyaux amours.»

⑤ 美女が塔のすそに腰を下ろして

美しい女性が一人、塔のすそに腰を下ろし、泣いてはため息をつき、ひどく悲しんでいるようだった。父親は彼女にたずねる。「娘よ、どうしたというのです。夫がないのが辛いのですか、それともお仕えするご主人さまがないからですか。」「いえ、夫もご主人さまも要りません。あの塔の中で衰弱している私の愛する人が恋しいのです。」「いとしい娘よ、神にかけて言いますが、あなたがあの男を取り戻すことはありません。明日の明け方に、あの男はつるされることになっているのです。」「お父さま、もしあの人がつるされたならば、私をあの人と一緒に埋めて下さい。いずれ人はこう言うでしょう、『ここに誠実なる愛がある』、と。」

<逐語訳> La (定冠詞) belle 美女 se siet 腰を下ろす (古仏語 se seoir の 3 人称単数、

現代語は s'assoit か s'assied) au~に pied 足下、すそ de~の la (女性形定冠詞)

tour 塔 (なお男性名詞の tour は「ツアー」の意味。ツール・ド・フランスとか。) Qui

(関係代名詞、英 who、ここでは belle が先行詞) pleure 泣いている et そして soupire

ため息をつく et そして mène ~へと続く grand 大いなる douleur 苦悩(現代語 douleur)

Son 彼女の pere 父親は lui 彼女に demande 尋ねる «Fille 娘よ qu 何を (que の短縮形) 'avez 持っている vous あなたは? (通常の親子間では2人称はtuだが、上流階級だからか敬語のvousを使っている。avez や voulez といった動詞の活用も同様。)

Voulez 欲しいのですか vous あなたは mari 夫が ou それとも voulez 欲しいのですか vous あなたは seigneur ご主人さま?» «Je 私は ne~しない veux 欲しい mari 夫が je 私は ne~しない veux 欲しい seigneur ご主人さま Je 私は veux 欲しい le

(定冠詞、現代フランス語では所有形容詞の前では不要、イタリア語は現代でも付ける。il mio amico のように。) mien 私の (現代語 mon) ami 恋しい人 qui (関係代名詞、英 who) pourit (衰弱している 現代語 pourrit) en ~で la (定冠詞) tour

塔.» «Et そして par~によって Dieu 神 belle 可愛い fille 娘よ a~において celui 彼 faudrez 失敗するだろう vous あなたは Car なぜなら il かれは sera ~であるだろう pendu つるし首にされる demain 明日 au point du jour (熟語で) 夜明けに» «Et

そして pere お父さん s'もし~ならば on ひとが le 彼を pend つるす enfouyez 埋めて下さい (現代語 enfouissez)moi 私を dessous その下に Si こういう風に diront 言うでしょう les (定冠詞) gens 人々は voici ここに~がある loyaux 誠実な (複数形)

amours 愛

⑥Du tout plongiet – Fors seulement

<テノール>

Du tout plongiet au lac de desespoir,
Trouve me suis sans attente n'espoir
D'avoir jamais des biens de Fortune;
Mais, se trouver puis scayson oportune,
Je me assairay d'en quelque chose avoir.

⑥絶望の湖に深く沈み込んで

絶望の湖に深く沈み込んでしまい、
私は自身をこう見つめる、
期待も希望もなく、幸運の女神から何も
手に入れられない者、と。
しかし、もし好機に恵まれるものなら
ば、私はそれを手に入れるべくみずから
にむち打って奮闘するのだが。

<バス>

Fors seulement latente que je meure,
En mon las cueur, nul espoir ne demeure,
Car mon malheur si fort me tourmente
Qui n'est douleur que par vous je ne sente,
Pourceque suis de vous perdre bien seure.

「私は死ぬのだ」という想い以外何も明確なものがなく、我が弱った心の中には希望も、落ち着く家もない。
我が不幸があまりにひどく私を苦しめるので、あなたによってもたらされるものは苦しみ以外は私には感じられない。
なぜなら、私があなただけを失うことを私はよく知っているからだ。

<逐語訳> Du tout (熟語で) 全く、完全に plongiet 沈んだ (現代語 plongeais) au
～へ lac 湖 de～の desespoir 絶望 (現代語 désespoir) Trouve 私は～を・・・とみなす
me 私を suis～である sans ～がない attente 期待 n' (ne 短縮形) ～がない espoir 希
望 D (de 短縮形、不定詞を作る) ～する'avoir 持つ、手に入れる jamais 決して～な
い des～の biens 産物 (この場合は「幸運」) de～の Fortune 幸運の女神 Mais しか
し se もし (現代語 si) trouver 見つける puis それでは scayson 季節? (saison の別
の表記?) oportune 適切な (適切な季節=好機?) Je 私は me 自分自身に assairay
攻撃するだろう (「事実を反した仮定」条件法、現代語 assaudroie) d～しようと'en そ
れの (好機の、「・・・の」de・・・=en) quelque chose (熟語で) 何か avoir 手に入れる

Fors～を例外として seulement ただ latente ひそんでいる que～という je 私は
meure 死ぬのだ (接続法) En～の中には mon 私の las 弱った coeur 心 (現代語
cœur) nul 何も～ない Espoir 希望 ne～もない demeure 家 Car なぜなら mon
私の malheur 不幸は si 「si～que・・・」で「とても～なので・・・だ」 fort 強く me 私
を tourmente 苦しめる Qui 関係代名詞、英語 which (先行詞 ce などが省略?) n'
～ない est～である douleur 苦悩 que (前出) par～によって vous あなた je 私が
ne～ない sente 感じる (接続法) Pourceque なぜなら (中世仏語。現代語は parce
que) suis 私は～である de～について vous あなたを perdre 失う bien よく seure.
～を確信している (現代語は sûr)

オケゲムが作曲したフランス語の歌曲 Fors seulement の歌詞と最高音域パートのメロディーをテノールのパートに置き、ブリュメルが Du tout plongiet の歌詞とメロディーを付加した歌曲。

二つのテキストが複雑に絡み合う、「多声音楽」「多テキスト音楽」の妙味を味わえる。

なお、韻を踏むために語順を変えている。本来の単語の位置は、以下の赤字の通り。

Du tout plongiet au lac de desespoir,
Trouve me suis sans attente n'espoir
D'avoir jamais des biens de Fortune;
Mais, se trouver puis scayson oportune,
Je me assairay d' en avoir quelque chose

Fors seulement latente que je meure,
En mon las coeur, nul espoir ne demeure,
Car mon malheur me tourmente si fort
que par vous je ne sente qui n'est douleur.
Pourceque suis bien seure de vous perdre.

⑦Que vous ma dame - In pace in idipsum

Que vous madame, je le jure, n'est ne sera de moy servie,
et tant qu'aura vostre serf vie, garde n'avez qu'il se parjure.

Une fois a vous me donnay, et derecief certes m'y donne.
Onques riens mieulx je n'ordonnay,
se vostre grace a moy se donne.
Grande me soit dicte l'injure s'aulture a ma franchise asservie,
et mort vueil avoir desservie se nulle dame me conjure.

In pace, in idipsum dormiam et requiescam.
Si dederō somnum oculis meis,
et palpebris meis dormitationem,
dormiam et requiescam.

⑦奥さまに誓います

<フランス語>

奥さまに誓います、私が仕える女性はほかにいませんし、
これからも仕えません、ということ。
そしてあなたのしもべの命ある限り、
しもべが誓いをみずから破るなどということは、ゆめゆめご心配には及びません。
かつて私はあなたにこの身を捧げましたが、
今もう一度、確かに私は自分自身を捧げます。
もしあなたが私に好意をお示しくくださったのならば、
私はそれにお応えできるような何もなしえておりません。
もし他人が私からご婦人さまへの忠誠心を奪い取ったのならば、
私はどんな侮蔑の言葉を言われても構いません。
そして私は死に値します、もし別のご婦人が私と通じ合ったのならば。

<ラテン語>

私は安らかにぐっすり眠るだろう、そして休息を取るだろう、
もし私の目とまぶたに、私が眠りを与えるならば。

<逐語訳> Que ～ということ。(英語の that 節と同じ) (ただし、以下 jure まで倒置
 法で後置されていて、que の内容は n'est から servie まで。) vous あなた madame 我
 が奥さまよ je 私は le こう jure 誓います (que 以下の内容を) n'est (恐らく「ど
 んな女性も」 nulle などの主語が省略) 現在～ではない ne sera 将来も～ではない de
 ～から moy 私 (現代語 moi) servie 仕えられる et そして tant qu～する限りは
 aura 「持つ」 avoir の 3 人称単数未来形。 vostre あなたの (現代語 votre) serf 農奴
 が (自分のことを「ご婦人にお仕えする者」としてこうたとえている) vie 命 garde
 qu' ～ということ。(英語の that 節と同じ。garde の内容を説明。) il その男が se みず
 から parjure 誓いを破る (前出の jure の対義語) Une fois 一度 a～に vous あなた
 me 私を donnay 捧げた (現代語 donnai) et そして derecief ただちに (中世仏語)
 certes 確かに m'私を y そこへ (あなたへ) donne 捧げる Onques(
 否定語をともなって) 決して～ない riens 何もない mieulx (ご婦人が見せた好意よ
 りも) より良い (現代語 mieux) je 私は n'～しない ordonnay 手配した (現代語
 ordonnais) se もし (現代語 si) vostre あなたの grace 好意が (古仏語) a～に moy
 私 se みずからを donne 与える Grande 多大なる (後の injure を修飾) me 私に soit
 どうか～でありますように。(接続法) dicte 言われた (現代語 dite) l'injure 侮蔑 S'
 もし (Se 短縮形) aultre 他人が (現代語 autre) a 動詞 avoir 3 人称単数形 (英 have)
 ma 私の franchise 女性への忠誠心を asservie 奉仕させた、奪い取った

et そして mort 死に vueil〜に値する（現代語 vaille） avoir desservie 他人と通じたことが se もし nulle どこかの（現代語 quelque?） dame ご婦人が me 私と conjure つるんでいる In pace 安らかに in idipsum 完全に dormiam 私は眠るだろう et そして requiescam 安息するだろう Si もし dederò 私が与えるであろうならば somnum 眠りを oculis 目に meis 私の et そして palpebris まぶた meis 私の dormitationem 眠りを（上述の somnum と同義） dormiam 私は眠るだろう et そして requiescam 安息するだろう。

⑧La, la, la, je ne l'ose dire

La, la, la, je ne l'o... je ne l'o...
je ne l'ose dire.

La, la, la, je le vous dirai,
et la, la, la, je le vous dirai.

①Il est un homme en not' ville
qui de sa femme est jaloux.
Il n'est pas jaloux sans cause,
mais il est cocu de tout.
La, la, la...

②Il n'est pas jaloux sans cause,
mais il est cocu de tout.
Il aprete et si la mene
au marche s'en va a tout.
La, la, la...

⑧寝取られ亭主

ラララ、言わない方がいいわね・・・
言わないわね・・・
ラララ、でも言っちゃうわ、
ラララ、もう言っちゃうから。

私たちの町に妻に焼き餅を焼いている男が
いるんだけど、
あいつはわけもなく妻に嫉妬してるわけじゃ
ない。何とまあ、あいつは全くの寝取られ男
なんだよ。ラララ・・・

あいつはわけもなく妻に嫉妬してるわけじゃ
ない。何とまあ、あいつは全くの寝取られ男
なんだよ。
もしあいつが準備して嫁を市場に連れて行こ
うものなら、嫁は誰とでもどっかへ消えちま
う。ラララ・・・

③Enfin, las de ce supplice
Le pauvre homme se pendit
Mais sa femme par malice
Chez Lucifer le suivit
La, la, la...

④La morale de cette histoire
C'est qu'avant de se marier
Il faut savoir le jour même
Que c'est pour l'éternité
La, la, la...

結局、苦悩に耐えかねて

哀れな男は首をつちまった。

だけど、嫁は反省なんかするどころか、

自殺の罪で地獄へ落ちることになった夫の

後を追って、自分も放蕩の罪で地獄への道をまっし
ぐら。ラララ・・・

この話の教訓は、こうだ。

人は結婚する前日のまさにその日に知っておくべき
だ、結婚は死後に天国へ行くか地獄へ行くか、も決
めてしまうものだってことを。

ラララ・・・

(逐語訳) La, la, la, ラララ je 私は ne～しない l'それを ose あえて dire 言う je 私は
le それを vous あなたに dirai 言います Il あいつは est～だ un homme 男 en ～に
not'私たちの (notre の語尾消失形) ville 町 qui (関係代名詞) de～に sa 彼の femme
妻 est ～のだ jaloux 嫉妬している Il あいつは n'est pas～でない jaloux 嫉妬している
sans～なしに cause 理由 mais 何とまあ (間投詞) il あいつは est～だ cocu 寝取ら
れ男 (本来は「カッコウ」のことで、カッコウのメスは他の鳥の巣に卵を産むことか
ら。) de tout 全くの Il あいつが aprete 準備をして (現代語 apprête) et そして si
もし (本来の語順は文頭) la 彼女を mene 連れて行く au marche 市場へ s'en va (彼
女は) 姿を消してしまう a tout どんな男とでも Enfin 結局 las うんざりして de～
に ce この supplice 苦悩 Le この pauvre 哀れな homme 男は se みずから pendit
首をつちた Mais しかし sa そいつの femme 妻は par～によって malice 悪意 Chez
～の家へ Lucifer 悪魔 le 男に suivit ついて行った (キリスト教では自殺は悪なので、

自殺した夫と同じく、妻も放蕩をやめずに地獄への道を歩んだ、ということ?) La
 (定冠詞) morale 教訓 de~の cette この histoire 物語 C'それは est~である qu'
 (英語の that 節) avant 前に de~の se marier 結婚する Il faut~しなくてはなら
 ない savoir 知る le その jour 日 même まさに Que (savoir の目的語を示す) c'そ
 れ (結婚) が est~である pour~のために l'éternité 永遠であること (キリスト教
 では最後の審判の後、人の魂は天国で永遠に安楽でいられるか、地獄で永遠の責め
 苦を受けるかの、どちらかである。)

⑨Il bianco e dolce cigno

Il bianco e dolce cigno
 cantando more, ed io
 piangendo, giung' al fin del viver mio.
 Stran' e diversa sorte,
 ch'ei more sconsolato,
 Ed io moro beato.
 Morte che nel morire
 M'empie di gioia tutt' e di desire;
 Se nel morir' altro dolor non sento,
 Di mille mort' il di sarei contento.

⑨白くて優しい白鳥は

白くて優しい白鳥は
 歌いながら死ぬが、私と云えば
 泣きながら人生の終わりを迎える。
 何と奇妙で異質な運命であることよ、
 白鳥がわびしく死に、
 私が幸福に死んでいくとは。
 死、それは死ぬことのただ中において
 私を全き喜びと欲望で満たすもの。
 もし死ぬ時に他の苦しみを感じないのならば
 1日に千回死んでも、私は満足だ。

※最後の文は、押韻のために語順を変更している。元の位置は以下の通り。

Se **non sento** altro dolor nel morir, **sarei contento** di mille mort' il di.

<逐語訳>Il (定冠詞) bianco 白く e そして dolce 優しい cigno 白鳥は cantando
 歌いながら (古来、白鳥は死の間際に美しい声で鳴くと言われてきた。単に「白鳥の
 歌」と言えば「死の間際の傑作」を意味する。) more 死ぬ (muore という言い方もあ
 る。) ed そして (e が、次の単語の頭が母音だと ed になる。) io 私は piangendo 泣
 きながら giung'到達する (giungo の語尾消失形) al ~へ (a+定冠詞 il) fin 終わり
 (fine の語尾消失形) del~の (di+定冠詞 il) viver 人生 (vivere の語尾消失形) mio
 私の Stran 奇妙な (strana の語尾消失形) 'e そして diversa 異なる sorte 運命 ch (関
 係代名詞 che の語尾消失形、先行詞は sorte) 'ei 彼は (「白鳥」cigno が男性名詞なの
 で代名詞も男性形、lui(彼は)の古風な表現egliの変形したもの?)more死ぬ sconsolato
 わびしく(「なぐさめられた」consolatoの対義語) Edそして io私は moro死ぬ(muoro
 という言い方もある) beato 恵まれた、幸運な Morte 死 che (関係代名詞、先行詞
 は morte) nel ~の中に (in+定冠詞 il) morire 死ぬこと M'私を empie 満たす di~
 によって gioia 喜び tutt' 完全な (tutto の語尾消失形) e そして di~によって desire
 願い; Se もし nel ~で morir 死ぬこと (morire の語尾消失形) 'altro ほかの dolor 苦
 しみ (dolore の語尾消失形) non~しない sento 私は感じる Di ~に (contento「満足
 した」を修飾する。押韻のために倒置されて文頭に置かれる。)mille 千の mort 死(morte
 の語尾消失形) 'il (定冠詞) di 日、1日に sarei ~であろう (動詞 essere の条件法・
 事実と反する假定、英 I would be) contento 満足した

⑩Matona, mia cara

Matona, mia cara, Mi follere canzon,
Cantar sotto finestra, Lantze bon
compagnon.

Don don don, diri diri don don don don.

Ti prego m'ascoltare, che mi cantar de bon,
E mi ti foller bene, come greco e capon.
Don don don, diri diri don don don don.
Comandar alle cacce, cacciar, cacciar
con le falcon,

Mi ti portar becacce, grasse come rognon.
Don don don, diri diri don don don don.
Se mi non saper dire, tante belle razon,
Petrarcha mi non saper, Ne fonte d'Helicon.
Don don don, diri diri don don don don.

Se ti mi foller bene, mi non esser poltron,
Mi ficcar tutta notte urtar, urtar,
urtar come monton,
Don don don, diri diri don don don don
Don don don, diri diri don don don don.

⑩愛しい僕のお嬢さん

愛しい僕のお嬢さん、あなたに歌ってさし
あげたいのです。

窓の下で僕は歌います、こんな槍騎兵の僕
はあなたのお友達になれませんか。

(ギター之音)

どうか僕のことを、僕が歌う良いことを聞
いて下さい。

あなたのことが欲しいのです、ギリシャ人
が鶏を愛したように。

僕は狩りを指揮する、そして鷹を使って狩
りをするのです。

あなたにロニョーネ（腎臓）みたいにまる
まる肥った山シギを取ってきますよ。

(ギター之音)

僕は口説き文句なんかをうまく言えないん
です、詩人のペトラルカとか古代ギリシャ
とかの高尚な芸術にも疎いし。

(ギター之音)

もし僕のお愛を受け容れてくれるのなら、僕
は一生懸命やります。一晩中、牡羊みたい
に腰を打ち付けて、突っ込みまくりますよ。

(ギター之音)

<逐語訳>※ドイツ人の無教養な兵士が窓の下でギターをかき鳴らし、イタリア女
性を必死に口説いているという「セレナーデ」の場面設定である。そのため、歌詞
にはドイツ語訛り・動詞を活用させず原形で使うなど文法的誤りが散見される。赤

字=動詞を活用させず原形のまま使用。たどたどしいイタリア語を表現。

Matona お嬢さん(madonna のドイツ語訛り) mia 私の cara 可愛い Mi 私は (Io の文法的誤り) follere ~したい (volere のドイツ語訛り、正しくは voglio) canzon 歌(canzone の語尾消失形) Cantar 私は歌う (cantare の語尾消失形、正しくは canto) sotto~の下で finestra 窓 Lantze 槍騎兵 (正しくは Lanciere) bon 良い (正しくは buono) compagnon 仲間 (正しくは compagno) Don don don, diri diri don don don don. (ギターをかき鳴らす音) Ti あなたに prego お願いする m'私のことを ascoltare 聞いてくれることを che (英語の that 節、聞いて欲しい内容)mi 私は (io の文法的誤り) cantar 歌う (cantare の語尾消失形、canto の誤り) de bon 良いことについて (文法的に誤り、後述の試訳参照) E そして mi 私は (Io の文法的誤り) ti あなたが foller~が欲しい、好きだ (volere のドイツ語訛り、正しくは voglio。前述の foller と意味が異なる。) bene とても come~のように greco ギリシヤ人 e と capon 食用鶏 (正しくは cappone) Comandar 僕は指揮する (comandare の語尾消失形、正しくは comando) alle~へ (a+定冠詞 le) cacce 狩り cacciar 僕は狩りをする (cacciare の語尾消失形、正しくは caccio) con~とともに le (定冠詞、il の誤り) falcon 鷹 (falcone の語尾消失形) Mi 私は (Io の誤り) ti あなたに portar 持ってくる (portare の語尾消失形、正しくは未来形で porterò) becacce 山シギ (現代語は beccacce) grasse 肥った come~のように rognon 食用腎臓 (rognone の語尾消失形) Se もし (この語は不要?)

mi 私が (io の文法的誤り) non~しない **saper** できる (**sapere** の語尾消失形、
正しくは so) dire 言うことが tante 多くの belle すてきな razon (あなたを好きな)
理由 (正しくは ragioni) Petrarca ペトラルカ mi 私は (Io の文法的誤り) non
~しない **saper** 知っている (**sapere** の語尾消失形、正しくは so。前述の **saper** とは
意味が異なる。) Ne~も・・・でない (現代語 né) fonte 泉 d'~の (di の語尾消失
形) Helicon ヘリコン (ミューズが住むとされる山、泉はミューズを祀っていて、
ペトラルカと共に「高尚な芸術」の象徴。) Se もし ti あなたが (tu の誤り) mi
私を **foller**~が欲しい、好きだ (**volere** のドイツ語訛り、正しくは vuoi 。) bene よ
く mi 私は (io の誤り) non~ない **esser**~である (**essere** の語尾消失形、正しく
は未来形で sarò) poltron 怠けた(poltrone の語尾消失形) Mi 私は (Io の誤り)
ficcar 突っ込む (**ficcare** の語尾消失形、正しくは未来形で ficcherò) tutta notte (熟
語で) 一晩中 urtar 打ち付ける (**urtare** の語尾消失形、正しくは未来形で urterò)
come~のように monton 牡羊 (montone の語尾消失形)

⑪Veni dilecte mi

Veni dilecte mi, egrediamur in agrum,
commoremur in villis,
Mane surgamus ad vineas.
Videamus si floruit vinea,
si flores fructus parturiunt,
si floruerunt mala punica.
Ibi dabo tibi ubera mea.

旧約聖書・雅歌7章11・12節

⑪おいでなさい、愛しい人よ

おいでなさい、愛しい人よ、野原に出かけて
行って、田舎の家にとまりましょう。
ぶどう園に行くために朝早く起きて、見に行
きましょう、
ぶどうが花咲いたかどうかを、
花々が実をつけたかどうかを、
そしてザクロが花を咲かせたかどうかを。
そこで、私はあなたに私の乳房を与えます。

<逐語訳>Veni おいでなさい dilecte 愛しい人よ(呼格)mi 私の(呼格) egrediamur
行きましょう(1人称複数接続法) in～へ agrum 野原 moremur とまりましょう
(1人称複数接続法) in ～に villis 田舎の家 Mane 朝早く surgamus 起きましょ
う(1人称複数接続法) ad ～へ vineas ぶどう園(vineaの奪格) Videamus 見
ましょう(1人称複数接続法) si～であるかどうかを floruit 咲いた(3人称単数)
vinea ぶどう園が(主格) si～であるかどうかを flores 花々が fructus 実を(複数
形目的格) parturiunt みごもっている si～であるかどうかを floruerunt 咲いた
(floruitの3人称複数形) mala punica ザクロ(文字通りだと「カルタゴのリンゴ」)
Ibi そこで dabo 私は与えるつもりだ tibi あなたに ubera 乳房を mea 私の

⑫ Duo ubera tua

Duo ubera tua sicut duo hinnuli,
gemelli capreae;
collum tuum sicut turris eburnea;
oculi tui sicut piscinae in Hesebon quae sunt
in porta filiae multitudinis;
nasmus tuus sicut turris Libani
quae respicit contra Damascus;
caput tuum ut Carmelus et comae capitis tui
sicut purpura regis iuncta canalibus.
旧約聖書・雅歌 7 章 3～5 節

⑫あなたの二つの乳房は

あなたの二つの乳房は、まるで二匹のケッテイか、ふたごのノロジカのようにだ。
あなたの首は象牙でできた塔のようで、
あなたの目は、「民衆の娘の門」にあるヘシュボンの池のようだ。
あなたの鼻はダマスカスに対峙してそびえるレバノンの塔のようだし、
あなたの頭はカルメル山のようで、髪の毛は水路へとつながっていく王家の紫色のようだ。

<逐語訳> (※「あなたの」は主格ならば男性単数 *tuus*、男性複数 *tui*、女性単数と中性複数 *tua*、中性単数 *tuum* となる。また男性単数属格は *tui*。) Duo 二つの ubera 乳房は *tua* あなたの *sicut* まるで～のようだ *duo* 二匹の *hinnuli* ケッテイ (オスの馬とメスのロバの間に生まれるウマ科の雑種動物、ちなみに「ラバ」はオスのロバとメスの馬の間に生まれる。) *gemelli* ふたごの *capreae*; ノロジカ *collum* 首 *tuum* あなたの *sicut* まるで～のようだ *turris* 塔 *eburnea*; 象牙の *oculi* 両目 *tui* あなたの *sicut* まるで～のようだ *piscinae* 池 *in*～にある *Hesebon* ヘシュボン (現在のヨルダンのヨルダン川流域の古代都市) *quae* (関係代名詞、先行詞は「池」*piscinae*) *sunt*～に存在する (英語で言う *be* 動詞の 3 人称複数形) *in* ～の *porta* (城郭都市の) 門 *filiae* 娘の (単数形) *multitudinis* 民衆の、大勢の人々の (「大勢の人々の娘」がなぜ単数形なのか不明。「門」*porta* が女性名詞なので、城塞都市の門が

そういう名前と呼ばれていたか?) *nasus* 鼻は *tuus* あなたの *sicut* まるで~のよ
うだ *turris* 塔 *Libani* レバノンの *quae* (関係代名詞、先行詞は「塔」*turris*) *respicit*
~の方を向く *contra*~に対峙して *Damascus* ダマスカス (現在のシリアの首都、前
置詞 *contra* の格支配により直接目的格、ラテン語は固有名詞も格変化するので注
意!); *caput* 頭は *tuum* あなたの *ut* まるで~のようだ (*sicut* と同意) *Carmelus*
カルメル山 (イスラエルの山) *et* そして *comae* 髪の毛 *capitis* 頭の (前出の *caput*
の属格) *tui* あなたの (*capitis* 「頭の」を修飾するので男性単数属格。) *sicut* まる
で~のようだ *purpura* 紫色 *regis* 王の *iuncta* つなげられた *canalibus* 水路によっ
て。「手段」を表す奪格。(赤みがかった髪の毛の美しさを、枝分かれして水路を進む
王室の紫色の船にたとえた?)

⑬ Go crystal tears

Go crystal tears, like to the morning show'rs,
And sweetly weep into thy lady's breast.
And as the dews revive the drooping flow'rs.
So let your drops of pity be address'd
To quicken up the thoughts of my desert,
Which sleeps too sound whilst I from her depart.

Haste, restless sighs, and let your burning breath
Dissolve the ice of her indurate heart,
Whose frozen rigour, like forgetful Death,
Feels never any touch of my desert,
Yet sighs and tears to her I sacrifice
Both from a spotless heart and patient eyes.

⑬ 行くが良い、透き通った涙よ

行くが良い、透き通った涙よ、朝の通り
雨のように、愛しい人の胸へとたおや
かに流れ行け。

そしてあたかも水滴がしおれかかった
花々をよみがえらせるように、お前た
ちの憐れみのしずくで私の空虚な心の
荒野を生き返らせよ、その心は彼女か
ら私が離れている時は、死んだように
眠ってしまっているのだから。

急ぐが良い、絶え間ないため息よ、お前
の燃えるような吐息で彼女の頑なに心
の氷を溶かすが良い。

あたかも忘れっぽい死神のように、そ
の氷の凍り付いた冷酷さは、私の心の
荒野など全く見向きもしない。

それでも私はいけにえとして捧げよ
う、汚れのない心と我慢強い目からや
って来た、このため息と涙を。

<逐語訳> Go 行け crystal 透き通った tears 涙よ like to~のように the (定冠詞)
morning 朝の show'rs 通り雨(showers の音節を減らして1行を10音節にするための変
形) And そして sweetly たおやかに weep 流れ行け (「粒になって流れる」意味と
「涙を流す」意味を掛けている。) into ~へと thy お前の lady's 意中の女性の breast 胸
And そして as~のように the (定冠詞) dew's 水滴が revive 生き返らせる the (定冠
詞) drooping しおれかかった flow'rs 花々 (flowers の音節を減らして1行を10音節に
するのための変形) So そのように let~させなさい your あなたの drops しずく (涙の
こと) of~の pity あわれみ be address'd~を準備させられる To quicken 生命を与
えることを up (前の動詞を強調) the (定冠詞) thoughts 思い of~の my 私の desert
(心の)荒野 Which(関係代名詞、先行詞は desert) sleeps 眠る too あまりにも sound
ぐっすりと whilst~している時は I 私が from~から her 彼女 depart 離れている (本
来の語順ではIの直後で、押韻のために倒置されている。) Haste 急げ restless 絶え間
ない sighs ため息よ andそして let~させなさい your あなたの burning 燃える breath
吐息に Dissolve 溶かす the (定冠詞) ice 氷を of~の her 彼女の indurate 硬化した
heart 心 Whose (「~の」を表す関係代名詞、先行詞は ice) frozen 凍った rigour 厳
しき like~のように forgetful 忘れっぽい Death 死神 Feels never 決して感じない
any どんな touch 感触も of~の my 私の desert (心の) 荒野 Yet それでも sighs た
め息を andそして tears 涙を to her 彼女に I 私は sacrifice ささげる Both 両方 from
~からの a (不定冠詞) spotless 汚れない heart 心 and と patient 忍耐強い eyes.目

⑭ Ah, dolente partita!

Ah, dolente partita!
ah, fin de la mia vita!
da te parto e non moro?
E pur i provo
la pena de la morte
e sento nel partire
un vivace morire,
che da vita al dolore
per far che moia immortalmente il core

⑭ ああ、つらい死出の旅立ちよ

ああ、つらい死出の旅立ちよ、
わが人生の終わりよ。
あなたから私は別れるが、私は死んだりし
ないのだろうか。
けれども、私は死の痛みを感じる、
そして別れのうちに、
「生きている死」を覚えているのだ、
それは失恋の痛み魔法の生命を与える、
私の心が永遠に死の苦しみを感じ続けるよ
うに仕向けさせるために。

<逐語訳> Ah ああ dolente つらい partita(死出の)旅立ち ah, ああ fin 終わり (fine
の語尾消失形) de la~の (現代語 della) mia 私の vita 人生の da~から te あなた
parto 私は離れ e そして non~しない moro 私は死ぬのだろうか? (現代語は
morrò、「死ぬ」morire の1人称単数未来形。) E pur それでも (現代語は eppur、
名言「Eppur si muove それでも (地球は) 動いている。」を想起せよ。) i 私は (io
の短縮形) provo 感じる la (定冠詞) pena 痛み de la ~の (現代語 della) morte
死 e そして sento 私は感じる (前出の provo の言い換え。) nel ~の中に (in+il)
partire 別れ un ひとつの vivace 生きている morire 死 che (関係代名詞、先行詞
は morire) da 与える (現代語 dà) vita 生命を al~へ (a+il) dolore 痛み per~
のために far 変える (fare の語尾消失形) che (英 that 節、「変える」内容を説明。)
moia 死ぬだろう (morire の3人称単数接続法)

immortalmente 不滅に、永遠に il (定冠詞) core 心は (現代語 cuore、本来は il core が主語なので、che の直後に置かれるが、ここでは押韻のために倒置されている。)

⑮ Quel augellin che canta

Quel Augellin, che canta
Si dolcemente
E lascivetto vola
Hor da l'abete al faggio
Et hor dal faggio al mirto,-
S'havesse humano spirto,
Direbb': Ardo d'amor, ardo d'amore!
Ma ben arde nel core
E chiam' il suo desio
Che li rispond':

Ardo d'amor anch' io!
Che sii tu benedetto,
Amoroso, gentil, vago augelletto!

⑮恋に燃える鳥たち

あの小鳥、あれはとても甘い声で歌い、
メスを探して好色に木々を飛び回っている、
今はもみの木からブナの木へ行ったかと思えば、すぐにブナの木からギンバイカへと飛び移る。
もしあいつに人間の心があったなら、こう言うだろう。「俺は恋に燃えている、愛に燃えているんだよ。」
そしておのれの欲望の対象に呼びかける、
呼びかけられた方はそいつにこう答える、
「私も恋に燃えていますわ」と。
運良くお前の恋は実るがいい、
恋多き、魅力的な、美しい小鳥よ。

<逐語訳> Quel あの(Quello の語尾消失形) Augellin 小鳥は(「鳥」augello に「小さい」を意味する接尾辞-ino を付けた augellino の語尾消失形) che (関係代名詞、先行詞は Augellin) canta 歌う Si とても dolcemente 甘く E そして lascivetto 好色に(形容詞の副詞的用法、「好色な」lasciovo に「小さい」を意味する接尾辞-etto を付けたもの) vola 飛ぶ Hor 今は(Hora の語尾消失形、現代語は ora) da~から l (定冠詞) 'abete もみの木 al~へ (a+il) faggio ブナの木

Et そして hor 今は (前出) dal~から (da+il) faggio ブナの木 al ~へ mirto
ギンバイカ S'もし(se の短縮形)havesse (小鳥が) 持っていたならば (現代語
avesse、「持つ」avere の3人称単数接続法過去) humano 人間の (現代語 umano)
spirto 精神を (現代語 spirito) Direbb'(小鳥は)こう言うだろう (「言う」dire の
3人称単数条件法 direbbe の語尾消失形) : Ardo 私は燃えている d'~によって (di
の短縮形)amor 愛(amore の語尾消失形) ardo 私は燃えている d'~によって amore
愛! Ma でも ben よく (bene の語尾消失形) arde (小鳥は) 燃える nel~の中で
core 心 E そして chiam 呼ぶ (chiama の語尾消失形) 'il (定冠詞) suo 彼の desio
欲望 Che (関係代名詞、先行詞は desio) li 彼に (現代語 gli) rispond'こう答え
る。(risponda の語尾消失形) : Ardo 私は燃える d'~によって amor 愛 anch~も
また (anche の語尾消失形) 'io 私! Che (英語の that 節) sii (英語では be 動詞
に当る essere の2人称単数命令法) tu あなたは benedetto 恵まれている
Amoroso 恋する者 gentil 魅力的な (gentile の語尾消失形) vago 美しい augelletto
小鳥よ (「鳥」augello に「小さい」を意味する接尾辞-etto を付けたもの、タイトル
の augellin と同義。)

(翻訳：西宮東高等学校教諭 中井英文)